

町内5校の連携による12年間を見通した教育課程の研究開発 ー農業科・町民科の試みー

千葉大学名誉教授 ^{あまがさ}天笠 ^{しげる}茂

1 安房郡和田町における研究開発

先の号に続き、千葉県における研究開発学校について取り上げたい。今回は、千葉県安房郡和田町の5校連携による取組である。その取組が、今日に何を問いかけているか探ることにはしたい。

それは、2000（平成12）年から3年間の取組であり、連携5校とは、和田町立和田小学校・北三原小学校・南三原小学校・和田中学校、それに、県立安房農業高等学校である。

研究開発のねらいについては、町内5校が連携して教育課程を編成し、社会人等への学習機会を提供することにより、コミュニティの拠点として、生涯学習の町づくりに資する新時代の学校をつくる、とある。

その内容は、四つの教科（農業科、町民科、情報科、英語科（英会話））を新設し、総合的な学習の時間を廃止した教育課程を編成・実施することであり、既存の教科とともに、これら新設の教科を小学校第1学年から中学校第3学年まで9年間を通して位置付けるものであり、さらに、農業科については高等学校までつなげるというものであった。

なお、研究開発後の動きについて、まず、平成の大合併にともない和田町は2006（平成18）年に他の町村とともに南房総市となった。北三原小学校は、2008（平成20）年4月、南三原小学校に統合。また、和田小学校と南三原小学校は、2019（平成31）年4月、統合して嶺南小学校に。和田中学校は、2014年3月に閉校し、同年4月、丸山中学校と統合して嶺南中学校に。そして、2019（平成31）年4

月、保幼小中一貫型学校として南房総市立嶺南学園（嶺南小学校・嶺南中学校）は新たな歴史を刻み始めた。また、県立安房農業高等学校は、2004（平成16）年4月、県立安房拓心高等学校に校名を変更、総合学科を新設、現在に至っている。

このように、研究開発を終えた5校は大きな変化に遭遇している。しかし、当時の取組は研究開発の成果として残され、時を越えて今日に問いかけるものも少なくない。

2 小・中・高12年間の教育課程の開発

その一つが、小・中9年間、小・中・高12年間を見通す一貫した教育課程の開発の試みである。千葉県の小中一貫教育は、この和田町の試みに始まるといってもよい。当時、広島県呉市が、また、一年遅れて品川区などが研究開発学校に手をあげ、それぞれの地域において小中一貫教育が動き出そうとしていた。

千葉県の小中一貫教育は、その後、鴨川市における取組、さらに、市川市における義務教育学校の誕生など次第に広がりを見せることになる。この一連の流れに転機をもたらしたのが、和田町の研究開発である。

しかも、高等学校が加わり、域内の小・中と連携をはかり小・中・高校の12年間を見通した教育課程の開発の試みも、時代に先駆ける取組であった。高等学校に地方創生の核として域内の小中学校と連携して教育活動を推進する機能を持たせる。そんな時代に先駆ける取組として和田町の研究開発はあった。

3 農業科と町民科の新設—地域を知る—

和田町における研究開発は、生涯学習の一環として地域住民の参加にも配慮した一貫カリキュラムの開発でもあった。その中心となったのが、農業科と町民科の新設である。

農業科は、土にふれ、汗を流すことによって、地域の基幹産業である農業を体験的に学ぶとある。農業科を通して、第一次産業にかかわる内容を体験して実践できるようにするとあり、それを県立安房農業高等学校と連携し、小学校、中学校を通して取り組むというものであった。授業時数は、小学校：1・2学年10時間、3・4・5・6学年35時間、中学校：1・2・3学年18時間、である。

それは、米や野菜を育てる活動や酪農についての体験をはじめ、最先端の農業技術などに触れ、第一次産業が抱える問題点や課題を調べ、農業についての知識や技術を学び、見方・考え方を深め、実践する態度や心を養うというものであった。これに地域の人々が指導者となり助言者となって農業科を支えた。

ちなみに、開発された单元として、「土となかよし」「米作りをしよう」「サツマイモを育ててたべよう」「牛と共に生きる」「プランターの花を育てよう」「森を守り、森と生きる」「和田町と農業」などがあげられる。

一方、町民科については、町を知り、考え、愛着を育てることをめざすとして、地域の自然・産業・歴史・文化・行政等を素材とする学習内容によって構成されている。授業時数は、小学校：1・2学年34～45時間、3・4学年45時間、5・6学年50時間、中学校：1学年18時間、2学年20時間、3学年26時間、である。

ちなみに、開発された单元には、「くじらと共に生きる町 和田」「和田町の未来を語る」「地域社会の変化と住民の生活」などがある。

普通科改革を打ち出した新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議

まとめ）（2020. 11. 13）は、地域の課題や状況を踏まえた人材育成が求められているとして、「当該地域の人口動態や経済・産業構造、文化的・地理的要因等の実態を捉えることが必要である。」と指摘している。

それは、町民科のねらいと重なり合うものであり、和田町の研究開発が時代に先駆けるものであったことが確認できる。すなわち、農業科と町民科を新設して小中の取組をもとに高等学校と連携を図る和田町の試みは、時代を越えて今日のカリキュラム開発に示唆するところも少なくない。

4 “農業王国千葉” への問いかけ

千葉県が全国有数の農業県であることはよく知られている。農業生産高も全国第4位で、全国第1位の品目も多数あることをもって、自らを“農業王国千葉”と称している。

その“農業王国千葉”における農業教育に対して、和田町の農業科は時を越えて問いかけている。しかも、環境問題がいわれ、食糧問題がいわれるなかで、その問いかけは一層重みをもってきたといえなくもない。

もっとも、和田町における研究開発は農業科などの新設にとどまり、全体を見通し他教科・領域との関わりなど、細分化された教育課程についての検討は残された課題とされた。

これをどう受け止めるか。現代的課題として農業教育をとらえ教科等横断的に進めていく。そのようなカリキュラム・マネジメントをもって応じていくか。問いかけへの応答が問われている。

参考資料

- ・千葉県和田町小・中・高等学校『平成14年度研究開発実施報告書（第三年次）』2002年